

インクルーシブ教育推進のための 交流及び共同学習について

平成29年度は、大阪教育大学附属中学校と年間10回程度の交流及び共同学習を行った。また、大阪市立喜連中学校の特別支援学級と初めて年間4回の交流及び共同学習を行った。交流及び共同学習を中学校の学期制とも合わせ、次のとおり大きく3つの時期（ファーストステージ、セカンドステージ、サードステージ）に分けて考えた。平成30年度もインクルーシブ教育システムの構築を目的とし、3つの時期に分けて大阪教育大学附属中学校と年間10回程度の交流を行った。また、今年度は大阪府立障がい者交流促進センター（ファインプラザ大阪）、大阪市立長居障がい者スポーツセンター、セレッソ大阪、パラリンピック選手と連携をとることで、地域とのつながりを深め、障がい者スポーツにおいてより専門性の高い指導を目指した。

ファーストステージ（全4回）

ファーストステージでは、まず自己紹介、グループ名決めを行い、レクリエーションゲームで交流を深めていった。そしてセレッソ大阪のコーチに来校してもらい、サッカーを通して交流をさらに深めていった。また、車椅子スポーツ選手の講師を招聘し、障害があっても生き生きと輝いている人たちの様子を知ることによって、障害理解に結び付けていった。



セカンドステージ（全3回）

セカンドステージでは、パラリンピック種目である車椅子バスケットボールをメインテーマに取り組んだ。1回目は大阪府立障がい者交流促進センター（ファインプラザ大阪）より講師を招き、スポーツタイプの車椅子の基本操作を教えていただいた。2回目、3回目は大阪市立長居障がい者スポーツセンターより講師を招き、車椅子の基本操作の復習から、車椅子に乗った状態でのボールの扱い方、パスシュート、ゲーム等を教えていただいた。



サードステージ（全4回）

サードステージでは、今年度の交流及び共同学習の内容を生徒たちがふりかえり、プレゼンテーションの形にまとめた。生徒たちが学習を進める中でよかったこと、課題に感じたことを反芻する中で、交流及び共同学習の有効性を自ら感じ取っていくことをめざし取り組んだ。そして、本日の大阪教育大学特別支援学校の研究実践報告会の授業にて、特別支援学校の生徒たちがプレゼンテーションを行い、交流及び共同学習の成果を発表する。



評価尺度（科学的根拠）

質問紙調査

昨年度、交流及び共同学習の効果を測る質問紙調査（アンケート）を作成した。今年度に関しては、そのうちの附属中学校の生徒用アンケート、特別支援学校の教師用アンケートの2種類を使用し、最初の間接交流の授業が始まる前と、ファーストステージの後、セカンドステージの後、全ての交流及び共同学習が終わった後の4回行う。

印象評価

大阪教育大学の学生複数名に、本題であるセカンドステージ初回の車椅子体験の授業とセカンドステージ最後の授業の様子を見てもらい、交流が深まっているかどうかの印象評価を行う。その変化で交流及び共同学習の効果を測る。

ルーブリック評価

セカンドステージは学習内容が大きく変化しない。教師がその授業の目的をだまかに示し、授業最後に生徒が、その授業についてルーブリックを用いて自己評価を行う。セカンドステージの1回目の交流及び共同学習の最後のルーブリック評価の変化で、生徒から見た交流及び共同学習の効果を測る。

エピソード記録

授業の最後に「ふりかえりシート」をとっている。質問は3項目で、本校生徒、附属中学校生徒のそれぞれで答える形式である。また、交流及び共同学習の授業のエピソードを丁寧に記録する。これは授業改善のためでもあるが、生徒の行動や発言などのエピソードを周りの教師がまとめて記していくことで、生徒の変化を追い、質問紙調査の裏付けをするものである。